富士の田舎芸

第17回

柏原殻臼挽唄（かしわばらからうすひきうた）

保存会の始まりは昭和六十年。地域の老人会の人たちが、もともとあった殻臼挽唄を、柏原のうたとして手直ししたことがきっかけでした。初めは、うたしかありませんでしたが、平成四年から演じ手や語り手なども加わり、手作業の大変さや農業の楽しさも伝えています。

現在は機械化された米づくりも、「米」という漢字があらわすように、八十八の手間がかかり、昔はすべてが手作業で楽ではありませんでした。

殻うすひきは、農作業のもみすり作業の一こまで、うすを手で回し、もみ殻と玄米に分ける作業です。

農作業の合間を演じる様子には、素朴な会話の中にも温かい味があり、昔を忍ぶよい機会にもなっています。温かさは、うたやせりふだけでなく、手づくりの衣装や小道具、セットにもうかがえます。

現在の会員は、小学校二年生から八十歳代までの二十六人。五、六年前から小中学生が参加するようになり、うたい手として登場します。演じ手は七十歳代、八十歳代。実際に農作業をしてきた人たちなので、手つきや腰つきなど、とても上手に演じています。

柏原殻臼挽唄保存会会長
高木 孝悦（たかよし）さん（沼田新田）

役員や会員はほぼ柏原二丁目の人たちで構成され、町内挙げてこの活動に取り組んでいます。昨年は、ふるさと芸能祭に出演しました。子どもからお年寄りまで参加しているので、和気あいあいとした雰囲気で活動しています。

今の悩みは、演じ手の高齢化です。農作業を経験してきた人たちの演技は、経験のない人と比べものにならず、次を担う人がなかなか出てきません。演じ手をふやすために、また地域で継承していくために、将来は柏原二丁目にとどまることなく、柏原地区全体に広げて活動していきたいと考えています。

私たちは、農作業する古きよきものの姿を残したいと、この会を引き継いできました。これからは、いろいろな場で、柏原殻臼挽唄を伝えていきたいと思っています。

こちら編集室

今回の特集の取材や編集をしていて、「かかわり」という言葉に幾たびとなく接した。

私の場合、中学生のとき部活動で出会った楽器や音楽に今も親しんでいる。活動を通じ今までにさまざまな人と「かかわり」を持つことができた。人が私を成長させてくれ、生涯の楽しみをもたらしてくれた。

取材でいくつかの学校に足を運び、元気にあいさつしてくれる子どもたちから力をもらった。お返しにふれあい協力員になろうかな。

人口 242,392人 （前月比＋104）
男 120,688人 （＋70）
女 121,704人 （＋34）
世帯 83,828世帯 （＋86） 10月1日現在
編集・発行 富士市総務部広報広聴課
〒417-8601 静岡県富士市永田町1-100
☎51-0123(代) FAX51-1456

ホームページ http://www.city.fuji.shizuoka.jp/
広報ふじは環境に優しい古紙100％の再生紙と大豆油インキを使用しています